

私の夢

私の夢は看護師として救急医療を学び、その後、移植コーディネーターになる事です。私が医療を学びたい原点は、生後間もない娘との闘病経験にあります。

約5年間の中で2度の骨髄移植、在宅医療、緩和医療、そして看取りを経験しましたとてもかけがえのない毎日でした。特に終末期において、娘の余命を知らながら葛藤の中、幸せを見つけようとした日々は、今でも宝物であるのと同時に、悲しみを受け入れる大きな力になったといえます。

終末期の娘は、ほぼ毎日輸血を必要とし、無菌室からも出られず、繰り返す感染症やがんの痛みをコントロールする為に、いくつもの点滴を行い、モニター、酸素マスクなど、小さな体にたくさんの我慢を強いられる状況でした。1日を無事乗り越えても、次の日の状況は良くなるわけではなく、毎日出てくる新たな問題に私達家族は希望を失いかけていました。しかし娘は、その辛い状況の中でも時折笑顔を見せてくれました。小さくて大きな一つの命を前に「生きるとは何だろう」と考えずにはられませんでした。

主治医と話し合いを重ね、その後娘は亡くなる2日前まで毎日のように大好きなお兄ちゃんと散歩に出かける事が出来ました。駆け回る事は出来なくても、自然の中で家族と共に過ごす僅かな時間に私達は希望を見出し、出来る範囲で幸せを感じる事ができました。

娘が2度目の骨髄移植を無事終えた頃、心臓移植をしなければ、あと数年しか生きられないという男の子に出会いました。「私の心臓でよければ今すぐあげるのに」とお母さんは目を伏せ冗談っぽく話されました。私は言葉が見つからず、運命の不公平さに共に泣く事しかできませんでした。

どの患者、家族にも幸せの形、物事の捉え方など非常に個別性がありましたが、やはり命こそ宝であり、最期の瞬間まで希望に支えられるべきであると、切にそう感じました。治療の限界を知り、それでも生きたいと願う人の切実な思い、また命の灯を違う形で繋げたいという願い、それぞれの尊い命と願いを繋ぐのが移植コーディネーターであり、生と死について深く考える仕事であると思います。

私は、まずは看護師として救急医療の現場で、目の前の命に向き合い、少しでも多くの命を救う手助けが出来るようになりたい。そして十分経験を積んだ後、移植コーディネーターを目指したいと考えています。命に最大の敬意を払い、思いを繋ぐ掛け橋になるのが私の夢です。

今後、これらの事を胸に抱き、専門的な知識を深め、夢に向かって一步一步着実に前進し、一人の人間として力強く生きていきたいと思います。この歩みこそ娘への恩返しであると考えているからです。